
コードギアス

真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス

【Nコード】

N8942Y

【作者名】

真琴

【あらすじ】

コードギアス本編から約10年後の話です。

矛盾してたりするかもしれませんがそこは目を瞑ってください。

誤字脱字や間違っている所があれば感想にてお願いします。

第一章〈始まり〉

俺の名前は神無月 龍。アッシュフォード学園に通う学生だ。10年前、ここは変わった。エリア11と言う名前は元の日本になり、また俺達はイレブンとは言われなくなった。それはゼロのおかげだ。魔王ルルーシュを倒した英雄。あの時俺はあのパレードに居たが当時7歳の俺には良く解らなかった。今でも解らない所があるけどな。

ちなみに今は放課後。家に帰宅してる途中だ。

風が吹き、青い空を見ると飛行船があった。何か宣伝している様だ。でも様子がおかしい。ビルに突っ込んで要る。俺は咄嗟に携帯を取り出し、飛行船が突っ込んで要るテレビ局に連絡した。

女の人「はい。こちら」

俺は女の人を声を遮り話した。

龍「飛行船がテレビ局に突っ込んで要る！早く非難した方が――」

ドオオオオオオオオオン！！！！

携帯から色んな人の悲鳴が聴こえてきた。

龍「そんな……………一体どうして飛行船がテレビ局何かに。」

しばらく呆然と立ち尽くして要ると、テレビ局の方から悲鳴が聴こえてきた。さらに火が上がって要る。

アナウンス「緊急事態発生。直ちに住民は非難してください」

スピーカーから非難勧告が発令する。

ここから一番近いシェルターはあそこか。

何でシェルターがあると言うとお偉いさんが念のためにと作っていたらしい。

ふと目に入ったのはまだ5歳くらいの女の子だった。

俺はその子の所まで走って行った。

龍「こんな所に1人でどうしたの？」

俺は怖がらせない様に優しく聴いた。

女の子「お母さんがまだ帰って来ないの」

何だって!?

どうすれば良い!? このまま此処に居させるのは危険過ぎる。よし

っ。

龍「俺と一緒にいこう」

俺は女の子に手を差し伸べた。

女の子「でもお母さんが……」

女の子「麻衣！」

麻衣「お母さん！」

どうやら女の子の名前は麻衣と言うらしい。今はそんな事より非難が先だ。

龍「貴女がこの子の母親ですね？急いで下さいシェルターに向かいますので」

女の子「あの、貴方は？」

龍「今はそんな事はどうでも良い。早く非難した方が良い」

女の子は「はい」と言って俺に着いて来た。

5分ぐらいでシェルターに着いた。

龍「まだ人入りますか？」

俺は係員に入れるかどうか聴いた。

係員「あと2人入れます」

俺は一緒に来た2人をシェルターの中に入れた。

龍「このシェルターはもう閉めて下さい。俺は他のシェルターに行くので」

係員に言うが反対してくる。

係員「私が外に居ますので貴方は中に入って下さい。幸いただの事故みたいです」

事故？……………そんな訳が無い。

龍「これは事故では無い。計画されていた事だ」

係員は驚いて要るが無視して俺は続けた。

龍「まずテレビ局に飛行船が突っ込む。その後火が上がった。と言う事は恐らく……………テロだ」

係員はさらに驚いた。

龍「だがこれは飽くまで仮説だ」

そう仮説なんだ。でも多分当たって要る。
ただの事故で非難勧告何て出る筈が無い。これも仮説だがナイトメ
アフレームが出て来て要る。だから“緊急事態”なんだ。

しばらく空いているシエルターを探したがどのシエルターも満員だ
った。俺が諦めた時、俺の家が目に入った。

そういえば前に親父が地下があるって言ってたっけ。行ってみる価
値はありそうだな。

龍「少し埃っぽいな」

掃除をしていなかったからか埃っぽかった。

しばらく地下を歩き回ると扉があった。

龍「やる事も無いし入ってみるか」

その選択が俺の人生を大きく左右するとはその時はまだ俺は知らなかった。

第二章く戦いく（前書き）

書くのを忘れてましたがこれはエブリスタからの転載です

第二章く戦いく

中に入ると本でしか見た事の無い“ランスロット”があつた。

龍「しかもアルビオンかよ」

正確に言う共同兵器Zー01・ランスロットだがランスロットが改良を重ね、エナジーウィングをもつ二番目のナイトメアフレームのアルビオンが出来た。

けどどうしてこんな所にあるんだ？

男の人「それは僕のだよ」

急に声が聞こえたからそこを見ると親父が居た。

龍「親父のってどういう事だよ？」

親父は普通の人間の筈だ。

親父「ごめんね龍。今まで騙してて。僕は君の本当の親じゃ無い。」

俺の親父じゃ……………無い？

龍「俺の親父じゃ無いなら誰何だよ！」

スザク「僕の本名は枢木スザク。そのランスロットアルビオンのデヴァイサーだよ」

何……………だって？親父があのか枢木スザク？

龍「そんな事無い！親父は普通の人間じゃ無いか！」

スザク「ごめん龍。でも事実なんだ」

そんな…………。

龍「じゃあ俺は一体？」

スザク「君は戦争孤児なんだ」

戦争…………孤児。俺は親父とは何の関係も無いのか。

龍「じゃあ何で俺を引き取ったんだ？」

スザク「それは……………僕のせい何だ。僕がフレイアを使ったから何の罪の無い人達が」

龍「もう良いよ親父。俺は親父を許す。実の親じゃ無くて育てて

くれたのは親父だから」

俺は続けて言った。

龍「全ては過去。終わった事だから」

スザク「っ！」

そうだ。全ては過去なんだ。終わった事なんだ。過去は変えられない。でも未来は変えられる！

龍「親父は今からこれに乗って行くのか？」

スザク「いや、僕はゼロと言う仮面を被って要るからゼロとして出るよ。だから………君が乗るんだ」

は？何言ってるんだ？親父がゼロ？俺がランスロットに乗る？

龍「操縦の仕方解らないから！」

スザク「大丈夫。教えるから」

何だかんだで親父に操縦の仕方を教えて貰ったが、俺が乗って大丈夫なのか？

親父曰く俺の身体能力なら大丈夫だそうだ。

龍「ふう」

俺は一度息を吐いた。

龍「じゃあ親父……行って来る」

親父は声には出して居ないが「がんばって」と言っている様な気がした。

龍「よしっ。」

ランスロットが通る道が出来た。出来たと言ってもただ上に上がっただけなんだけど。

上に上がり切ってからペダルを踏んだ。

龍「くう！」

思っていたよりGが掛かる。でも次第に慣れて来た。そして現場に着いた時には完全に慣れていた。

相手が見えて来た。そこに居たのは俺の仮説通りナイトメアフレームが居た。

龍「サザーランドか」

サザーランドは10年前の戦争にブリタニア帝国が使っていた物だ。性能ではこっちが上だが戦場では“性能より経験”だ。確かに性能も良い方が良いが、幾ら性能が良くても操縦する腕が悪くては宝の

持ち腐れだ。

つまりは今の俺みたいな事だ。

男「何だ貴様？何故ナイトメアに乗っている？」

相手はランスロットを知らないのか。なら戦い易い。

龍「さあな」

俺はペダルを踏み前進しながらMVSを取った。そしてサザーランドの前まで行きMVSで素早くアサルトライフルを持って要る方の腕を切り落とした。

その間にもう一機がこちらにアサルトライフルを向けて撃って来た。

龍「普通仲間が居たら撃たないだらろ！」

そう言いながら傍に居るサザーランドを無理矢理盾にした。

サザーランドに乗って居た人は弾が当たる前に脱出した。

無人のサザーランドに銃弾が当たる。俺はシールド貼り爆風を防ぐ

とヴァリスでもう一機のサザーランドに向かい撃つ。危険を悟ったのか当たる直前に脱出した。

初めての戦闘でここまで出来れば上出来かな？

龍「レーダーに反応？なんだ？ナイトメアだと！？」

外をじっと見つめた。すると赤いナイトメアが空を飛んでこっちに來ている。あれはエナジーウィング！

赤いナイトメアと言えば紅蓮。エナジーウィングがあるから紅蓮聖八天極式か。

右手をこっちに向けて要る。あれは輻射波動！？

龍「なんでここに輻射波動を撃つんだよ！」

俺はランスロットのエナジーウィングを広げ飛んだ。

龍「ちっ！」

地上なら直ぐに慣れたが空中はそう簡単には行かない。すれすれで輻射波動を避ける。紅蓮から通信が入る。

カレン「何であんたがこんな所に！」

は？おいおいまさか紅蓮のパイロットの紅月カレンっていう人は俺を誰かと勘違いしてるんじゃない！

龍「あんた俺を誰と勘違いしてんだ！」

そう言った時、紅蓮の動きはピタツと止まった。

カレン「あんたスザクじゃないのか？」

龍「違う！」

しばらく沈黙し、

カレン「ごめんなさい！」

俺は親父と間違えられて殺され掛けたのか。

またレーダーに反応？

龍「鬱陶しい！何なんだ！」

あれはサザーランド？でもサザーランドに空を飛ぶ方法は無い。でも背中にあるのはフロートシステムで間違いない。裏で作ってたのか！何やってんだこの国は！

俺はランスロットを再び空に飛ばす。サザーランドは3機。行ける。

まず1機にMVSで斬り掛かる。サザーランドはそれを避けアサルトライフルを向ける。

龍「掛かったな」

俺はサザーランドにスラッシュハーケンを放つ。ハーケンはサザーランドの頭に当たり小爆発が起こりその後にMVSでサザーランドを斬る。

そしてそのサザーランドを他の1機にの所に飛ばしその後2機もろともヴァリスで撃った。

俺は動揺してる最後の1機をヴァリスで撃つがサザーランドは避ける。だが、

龍「予想済みだ！」

サザーランドが避けた方向にハーケンを放つ。アサルトライフルを持って要る方の腕を落とす。バランスを崩した隙に接近しMVSで

サザーランドを斬る。

ピー、ピー、ピー。

龍「また反応？いい加減にしてくれ」

正直に言おう、初めてナイトメアに乗ったから疲れた。ランスロットを進めようとする紅蓮が走っていた。

カレン「あんた達はまた戦争がしたいの！？」

カレンはそう言いながら輻射波動を相手に撃ち込んだ。

龍「あれは！？」

グロースターだと！

何でグロースターがあるんだ？相手はブリタニア帝国の軍人？でもグロースターはコーネリア殿下の親衛隊専用機だ。只の軍人がグロースターを持って居る筈が無い。

カレン「あんたも戦いなさいよ！」

おっと、考え過ぎた様だ。

龍「解ってるよ！」

俺はヴィリスをグロースターに向ける。

ピー、ピー、ピー

また反応？何か大量にあるぞ。でも見当たらない。一体何処に？

カレン「はああああ！！！」

紅蓮は下がつて居るグロースターを追って行く。

龍「ナイトメアが重なった？」

地下か！？

龍「そっちに行くな！」

カレン「何を言って……」

ダダダダダダダダダ！！！！

カレン「え？」

間に合え！

俺はランスロットをフルスロットルで走らせ紅蓮の腕を掴み引く。
その後下にヴィリスを向けて撃ち弾幕が薄れた瞬間に相手に突っ込んだ。

カレン「何やってるの！？」

龍「味方が居るから相手は撃てないんだよ！」

案の定相手は撃って来ない。正面に居るグロースターにハーケンを撃つ。避けても他のグロースターに当たるから大丈夫だ。

ボンッ！

よし。予定道理腕に当たった。俺は腕が落ちたグロースターに近付きアサルトライフルを奪い奪ったグロースターに撃つ。

撃破したのを確認してから他のグロースターに標準を合わせ撃って撃って撃ちまくる。

カチツカチツ

龍「弾切れか」

残りは後四機。紅蓮も戦ってるみたいだ。

龍「そっちの二機は頼むぞ？」

カレン「そっちこそちゃんとしなさいよ！」

罨に気付かなかった奴が何を言う。

残り二機。どう相手しようか。そうだな。撃破したグロースターからアサルトライフルを奪って撃つか！

ランスロットを撃破したグロースターまで走らせる。

当然そのまま行かせてくれないか。でもそんなやみくもに奪っても当たらないよ！

ピー、ピー、ピー

また！？と思い見ると銀色のナイトメア、ヴァインセントが居た。まさかギルフォード卿？

ギル「こちらヴァインセント、ランスロットに搭乗している者よ聞こえるか？」

龍「何？今取り込み中なんだけ…どっ！」

俺はギルフォード卿に返事を返しながら敵に向かって撃った。

ギル「貴殿は一体何者だ？」

龍「今はそれどころじゃ無いだ…ろっ！」

俺は撃破したグロースターの腕を残った一機投げる。そして避けた方にアサルトライフルで撃つ。

紅蓮の方を見ると既に終わって居た。

ギル「貴殿は一体何者だ？」

俺とカレンさんとギルフォード卿がナイトメアから降りて実際に会って第一声がこれだ。

龍「ただの学生です」

カレン「そんな訳無いじゃない」

カレンさんが否定する。
しかし、

龍「本当にただの学生だ」

ギル「ただの学生がランスロットに乗れると思って要るのか？」

は？

龍「誰でも乗れるんじゃないの？」

カレン「はあ」

ギル「はあ」

同時にため息着かれた。何で？変な事言った？

カレン「良い？ランスロットは普通の人は乗っても操縦何て出来ないの。それこそ訓練を積んだ兵でもね」

そうなんだ。

さてよ。じゃあなんで、

龍「何で俺は乗れたんですか？」

ギル「それはこちらが知りたいのだが」

そう言えば、

龍「何でギルフォード卿が此処に？」

ギル「街でナイトメアが暴れて居ると聞いてな」

何となくギルフォード卿と言う人物が解った気がする。

龍「じゃあカレンさん？」

カレン「私はゼロから街でナイトメアが暴れて居るって連絡があったから」

両方同じ理由何だ。しかもカレンさんは俺が暴れたと思って居たし、日本の政治は大丈夫なのか？

龍「そういえばどうしてギルフォード卿が此所に？」

だってさ、ブリタニアの騎士だぞ？

ギル「私は少し用事があったな」

用事ってどんな事何だろうか？

わざわざブリタニアから来たって事はゼロに用事かな？

カレン「ギルフォード卿、そろそろ時間です」

ギル「もうそんな時間か、よし君も来るんだ」

ギルフォード卿は俺にそう言った。
ん？

龍「俺も！？」

ギル「君には何故あの場に居たのか、そして何故ランスロットに乗れるのかを聞くために政庁に来てもらう」

カレン「ギルフォード卿!？」

カレンさんが驚いている。でも当たり前か、一般人に政庁に来てって言ってるんだからな。

龍「良いですよ」

カレン「ちょっ!？」

驚いている

だってさ、もしゼロに用事があるならゼロの仮面を被った親父に会えるんだぞ？

面白そうじゃないか。

ギル「ならランスロットに乗って私達に着いて来るんだ」

空飛ぶの苦手何ですけど………仕方ないか。

俺が行っても良いって言ったんだしな。俺は女の人を声を遮り話した。

龍「飛行船がテレビ局に突っ込んで要る!早く非難した方が――」

ドオオオオオオオオオン!!!!!!

携帯から色んな人の悲鳴が聴こえてきた。

龍「そんな……………一体どうして飛行船がテレビ局何かに。」

しばらく呆然と立ち尽くして要ると、テレビ局の方から悲鳴が聴こえてきた。さらに火が上がって要る。

アナウンス「緊急事態発生。直ちに住民は非難してください」

スピーカーから非難勧告が発令する。

ここから一番近いシェルターはあそこか。

何でシェルターがあると言うとお偉いさんが念のためにと作っていたらしい。

ふと目に入っただのはまだ5歳くらいの女の子だった。

俺はその子の所まで走って行った。

龍「こんな所に1人でどうしたの？」

俺は怖がらせない様に優しく聴いた。

女の子「お母さんがまだ帰って来ないの」

何だって!?

どうすれば良い!?!?このまま此処に居させるのは危険過ぎる。よしっ。

龍「俺と一緒に行こう」

俺は女の子に手を差し伸べた。

女の子「でもお母さんが……」

女の子「麻衣!」

麻衣「お母さん!」

どうやら女の子の名前は麻衣と言うらしい。今はそんな事より非難が先だ。

龍「貴女がこの子の母親ですね?急いで下さいシェルターに向かいますので」

女の子「あの、貴方は?」

龍「今はそんな事はどうでも良い。早く非難した方が良い」

女の子は「はい」と言っただけで俺に着いて来た。

5分ぐらいでシェルターに着いた。

龍「まだ人入りますか？」

俺は係員に入れるかどうか聴いた。

係員「あと2人入れます」

俺は一緒に来た2人をシェルターの中に入れた。

龍「このシェルターはもう閉めて下さい。俺は他のシェルターに行くので」

係員に言うが反対してくる。

係員「私が外に居ますので貴方は中に入って下さい。幸いただの事故みたいです」

事故？……………そんな訳が無い。

龍「これは事故では無い。計画されていた事だ」

係員は驚いて要るが無視して俺は続けた。

龍「まずテレビ局に飛行船が突っ込む。その後火が上がった。と言う事は恐らく……………テロだ」

係員はさらに驚いた。

龍「だがこれは飽くまで仮説だ」

そう仮説なんだ。でも多分当たって要る。

ただの事故で非難勧告何て出る筈が無い。これも仮説だがナイトメアフレームが出て来て要る。だから“緊急事態”なんだ。

しばらく空いているシエルターを探したがどのシエルターも満員だった。俺が諦めた時、俺の家が目に入った。

そういえば前に親父が地下があるって言ってたっけ。行ってみる価値はありそうだな。

龍「少し埃っぽいな」

掃除をしていなかったからか埃っぽかった。

しばらく地下を歩き回ると扉があった。

龍「やる事も無いし入ってみるか」

その選択が俺の人生を大きく左右するとはその時はまだ俺は知らなかった。

第二章く戦いく（後書き）

次は短いと思います

第三章く政庁にてく（前書き）

短いかな？

感覚は人其々なんで短いと言う事で

第三章　政庁にて

まあ、何だかんだで政庁に着いたんだけど……何て言うか飛ぶのに慣れてないからか何回も死にかけた。

ギル「どうした？早く来い」

龍「はい！今行きます！」

ギルフォード卿に呼ばれたよ。

確か今の総督はナナリーって言う人だよな？

魔王ルルーシュの妹の。

性格最悪なのかな？

嫌だな。

とか何とか考えてる内に総督室に着いたよ。

コンコンコン

ギル「失礼します。先程報告した神無月龍を連れて来ました」

ナナリー「ご苦労様ですギルフォード卿」

龍「で？俺は何をすれば良いんだ？」

俺はナナリー総督に聞いた。

早く帰って親父に聞きたい事があるからな。

ギル「私から言おう。まず、ランスロットは何処で手に入れたんだ？」

非常に困る質問だな。

正直に言うしか無い……………よな？

龍「家にあった」

ギル「貴様、ふざけているのか？」

正直に言ったら怒られたよ。

けど、家にあったとしか言いようが無いしなあ。

その時

ガチャ

ギル「誰だ？ノックもせずに入って来るとは」

何とそこにはゼロが居た。

ゼロって事は親父って事か？

ゼロ「私がプレゼントした」

ギル「プレゼントだと？いくらゼロであろうとその様な事を」

ゼロ「神無月龍は学校で素晴らしい成績だ。身体能力も高い。だから私は彼ならランスロットに乗れると判断した」

そんなに凄く無いぞ、俺の成績は。

親父、頼むから嘘は辞めてくれ！

ギル「見ていたら凄いのはわかった。だが、一般人にナイトメアに乗せるのはどうだろうか？」

ギルフォード卿、俺も今になってそう思うよ。

ゼロ「彼は一般人などでは無い」

は!?

何いっちゃってんの親父!一般人だよ?

俺は一般人!

ゼロ「ナナリー総督、貴女の母に姉が居た事はご存知かな?」

ナナリー「はい。お母様に聞いた事があります。何でも帝国一だったとか」

帝国一!?

そんな人が居たのか?

だったら何故どの書物にも載ってないんだ?

ギル「それと彼が一般人では無いのとどう関係がある?」

ゼロ「話は最後まで聞いて頂きたい。彼は、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの姉、アスカ・ランペルージの息子。本名は、リュウ・ランペルージ。彼は最強の血を引いている」

嘘だろ？

俺の母親が帝国一でナナリー総督の伯母で
って事は、俺とナナリー総督は従姉？

ギルフォード卿は驚いて要るのか固まっている。
でも、ナナリー総督は違う事に驚いて要るようだ。

ゼロ「貴女の兄であるルルーシュは知っていてランペルージュを使っ
ていたのかも知れませんか」

ナナリー「そうですね。でもこの話を聞いても彼がナイトメアに乗
ると言う事に対して解決していませんよ？」

ナナリー総督は凄いな。

こんな話を聞いた後なのに冷静だ。

良い総督だな。

ゼロ「そこで私は、彼を軍に推薦する」

龍「ちょっと待ってくれ。ゼロ、今の話が本当だと言う証拠は無い
し、それに俺は学生だ」

そうだ。

俺は学生何だ。

軍に入る理由が無いし、今の日本は安全じゃないか。

ゼロ「もし、今の日本が安全だと思っているならそれは間違いだ。現に今回テロリストはナイトメアを、それもグロースターを使っていた。これは軍に内通者が居る事を物語っている」

龍「だからと言って俺が軍に入る理由にならない！」

親父は何がしたいんだ！

そんなに俺を軍に入りたいのか！？

ゼロ「君は自分の実力をわかっていないようだな。君の数値は枢木スザクを越えている」

ギル「スザクくんを越えている！？」

ギルフォード卿が何か驚いているけど、俺はそんなに凄く無い。俺は……………弱い。

今回は偶々勝てただけなんだ。

だから

ゼロ「強くないたいか？」

！？

親父？

そんな事親父が一番知ってる癖に

龍「俺は、強くないたい」

ゼロ「軍に入れば強くなれる」

龍「本当ですか、ギルフォード卿？」

ギルフォード卿は急に話掛けられて少し驚いていたが答えてくれた。

ギル「私も最初は弱かった。だが、日々の鍛練のおかげで今の私が居る」

龍「カレンさんは？」

俺は軽く空気化しているカレンさんにも聞いてみた。

カレン「私も、最初は弱かったけど徐々に強くなった」

皆同じ事を言うな。

「強くないたいか？」

「軍に入れば強くなれる」

俺の答えは最初から決まっていたのかも知れない。
ただ、何かと理由を着けて否定していたんだ。

“日常”が壊れるのが恐くて。
“変わる”のが恐くて。

でも、もう恐れない。

どうせ親父も最初は弱かったって言うんだろ？

だから俺は

龍「軍に入ります。いや、入れて下さい！」

軍に入って強くなる！

ゼロ「ふっ。君ならそう言うと思っていたよ。因みに先程の話は本当だ。証拠はコーネリア殿下にでも聞くんだな。では、私はこれで失礼する。カレン、行くぞ」

カレン「はい。ゼロ」

親父とカレンさんは何処かに行ってしまった。

ナナリー「これで本当に良かったんですか？」

ナナリー「総督は優しいな。本当にルルーシュの妹か？」

いや、案外ルルーシュの性格は良かったりして。

そんな事を思っただけで要るとギルフォード卿が話だした。

ギル「軍に入るに当たって所属部隊だがそれは後日連絡する。それでは私は失礼する。積もる話もあるだろうしな」

ギルフォード卿も行ってしまった。

積もる話って何？

取り敢えず自己紹介か？

龍「神無月龍……いや、リュウ・ランペルジです」ナナリー「ナナリー・ヴィ・ブリタニアです。その、貴方とは従弟になるんですよね？」

礼儀正しいな。

今まで大人の人が敬語を使って挨拶するのは社交辞令しか知らなか

ったけど、ナナリー総督は違う。
社交辞令なんかじゃ無い。
何て言うか、優しさの塊？

リュウ「多分そうなりますね」

ナナリー「あの、敬語は辞めてくれませんか？従弟ですし、私の事もナナリーと呼び捨てで構いません」

リュウ「いくら従姉でも総督に敬語なしは」

この人無理難題を簡単に言うな。

ナナリー「そうですか」

リュウ「俺、軍ではリュウ・ランペルージュで行くってギルフォード卿に言ってくれませんか？」

ナナリー「はい。わかりました」

ナナリー総督は簡単に承諾してくれた。
良かった。

さて、帰るか。

リュウ「では、俺は帰ります。また、後日会いましょう」

ナナリー「さようなら。お気をつけ着けて」

ああ、また飛んで行かなくちゃいけないのか。

練習しようかな？

第三章↳政庁にて↳（後書き）

次も同じくらいです

第四章↳訓練学校↳(前書き)

とりあえずエブリスタの分はこれで全てです

第四章〈訓練学校〉

政庁の一件から一週間。

ギルフォード卿から連絡が入ったから俺は今政庁の中にいる。

何処に行けば良いんだっけ？

うろうろしていると電話が掛かって来た。

ギルフォード卿だ。

何で知っているかと言うと帰る時に携帯の番号を教えたから。

リュウ「はい」

ギル『今何処にいる？』

ギルフォード卿少し怒ってる。

リュウ「政庁のロビーです」

ギル『早く総督室に来い』

リュウ「わかりました。すぐ行きます！」

ちょっと怖かったから俺は急いで総督室に向かう。

ん？

所属部隊言うだけなのにわざわざ総督室で行うのか？

まあ、良いか。

どうせ直ぐにわかるしな！

コンコンコン

俺は総督室に着いたからノックした。

リュウ「失礼します」

ギル「遅いぞランペルージ！」

リュウ「すいません」

俺は謝ったさ。

だってギルフォード卿怖いんだよ!?

誰だって謝るよ!

ギル「さて、貴殿の所属部隊だがナナリー総督の親衛隊となった」

リュウ「は!?!何で?」

おかしいだろ新しく軍に入ったばっかなのに総督の親衛隊何て。

ギル「この間の戦闘を評価しての判断だ」

リュウ「この間って言ってもあの時は紅蓮がいたし」

俺一人じゃ絶対に殲滅出来なかった。

ギル「拘束した者全員が

あの白いナイトメアの搭乗者は誰なんだ? 強すぎる と言って
いてな。その事からナナリー総督の親衛隊でも問題が無いと会議で
決まった。貴殿が隊長だ」

隊長!?

普通親衛隊の隊長は騎士がするものだろ!?

ナナリー「私にはまだ騎士はいません」

リュウ「どうしてですか？」

ナナリー「今まではずっとゼロが騎士をしていましたから」

親父が？

どうしてだ？

また聞いたくか。

つーか親父何してるんだ？帰って来ない何て何考えてんだよ。

ギル「しかし、いくらこの間の戦闘が良くても親衛隊隊長になるのに反対する者が半数を越えている」

そりゃあそうだろう。

俺まだ弱いしさ。

ナナリー「ですので貴方には明日から訓練学校に通って貰います」

リュウ「訓練学校何てあるのか？」

ギル「五年程前に出来たばかりだ」

訓練学校に通うって事は軍の訓練学校だよな？
ナイトメアに乗るのか？

ギル「訓練学校の授業の内容はナイトメアの操縦などだ。詳しくは訓練学校に行ってから聞くんだ」

リュウ「いつから行けば良い？ んで、場所は？」

訓練学校があるのを今知ったからな。
場所がわからない。

ギル「制服と地図を今渡す」

地図か……

俺地図苦手何だよなあ

今思ったら俺苦手な物が多いなあ。

ギル「では、これを」

ギルフォード卿はそう言って渡してくれた。

んじゃあ家に帰るか

リュウ「失礼しました」

ナナリー「頑張って下さい」

ギル「多くの事を学んで来るんだ」

ナナリー総督とギルフォード卿は言葉をくれた。

正直泣きそうな位嬉しい。

まあ、泣かないけど。

さーて用意しに家に帰るか。

とは思ったものの、ランスロットに乗って帰らなきゃいけない。

何でランスロットで来たかだと？

家から政庁は遠いんだよ。歩いて一時間程だ。

いやね、歩いて行っても良かったけど練習と思ってランスロットで来たんだよ。

ちゃんとギルフォード卿に許可貰ったからな！

格納庫にスペースを空けてくれたし、ギルフォード卿って凄く良い人だよ。

なんやかんやで格納庫に着いたけど人が凄い。

ランスロットは一応有名だからね。

学校ではランスロットのデヴァイサーの枢木スザクは「ブリタニア

の白き死神」って教わる。

勿論魔王ルルーシュの騎士とは教わらない。

ただ、ナイトオブセブンの名誉ブリタニア人とだけ説明される。

ではなぜ有名なのか。

それはランスロットの性能にある。

ランスロットはどれだけ訓練した兵士でも扱えないからだ。

ランスロットの性能は凄い、そしてランスロットを扱える枢木スザクはもっと凄い。

そうアツシュフォード学園で教えて貰った。

そして恐らく訓練学校でも同じなんだろう。

教科書でしか見た事のないランスロットがあるから見ようと人が集まっているんだろう。

もし違うならそれは裏切り者の枢木スザクが乗っていたランスロットがある。

誰が乗って来たんだろう？

そいつは国にとって敵なのか？

と言う好奇心見たいなものだ。

第四章↳訓練学校↳(後書き)

ここからは更新遅くなりそうです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8942y/>

コードギアス

2011年11月26日22時50分発行